

俺の問いとその先は。

tol10

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

主人公である比企谷八幡。高校一年生の物語。

彼を取り巻くものは人のなんなのか。親しみ、楽しみ、悲しみ、憐れみ、期待に嫉妬……

彼の見た世界は彼のものであり、彼女の見た世界は彼女のものである。そんな矛盾で作られたこの世界。

人は他人に何を求め、何を奪って、そして与えていくのだろうか。

もしかしたら、というifとかそういうことではなく、完全に改変された物語。

タグの人物は登場してきたときにその都度追加。
こんな筆者が送る長編シリーズ第3作目、ご覧ください。

目次

F i f t h / a l b u m	F o u r t h / a l b u m	T h i r d / a l b u m	S e c o n d / a l b u m	F i r s t / a l b u m
76	53	29	15	1

First/album

俺は今、松葉をつき、前に進む。まあ簡単にいえば誰もいない廊下を歩いているわけだ。これを俺は今、松葉をつき、世界を動かすとかいつて中二病の名残を出してもいいかもしれない。なにそれダサイ。

松葉をつける理由なんて限られてくる。そして、俺はその限られた理由の中でも一位だろうという理由でついている。それすなわち、

高校初日、いわゆる入学式に、事故に遭った。ということだ。交通事故というのは松葉をつく理由第1位だろう。調べてないから知らないけどね。

事故の影響でクラスのコミュニティーには属せず、ぼっちになった。

……どこまで俺にぼっちの神様がついてくるのだろうか。誰か教えてくれんかねー。つと、誰もなにも、そもそも話す人がいないな。

眼が腐つてるとか超不便。いつから腐ったんだろうか、永遠の謎である。

つと、今日も今日とて下校時刻は訪れるものであった。なぜぼっちが早く帰らないかという、階段で松葉杖なんてついてたら邪魔だからである。こういう細かいところまで気を遣う、こんなことができる人はそうそういない。だから誰か養ってください。

本日5月14日、快晴。

中間テストもあと少し、というところ。高校の最初のテストは中学同様、簡単なものだろう。だから、誰かがノートを見せてくれなくても問題ない。と考えると事故をした時期は良かったのかもしれない。

……全然良くないな。

まあ最初のテストでいい点とって大半が調子に乗ってさようならという失敗を繰り返すリア充はよくわからん。

その点、勉強と読書とゲームと睡眠と食事しかない俺はそれなりに優秀である。ん？待てよ。俺、わりとやっつてること多いじゃん！なにこれついに俺もリア充か？！？

そんなことはめっささどうでもいい。そんなわけないだろ。だいたい、リア充になる気もないし。ぼっちとかマジ最強。ぼっち最強伝説とか書ける。なんなら最恐まである。

授業後の風（通称：リア充どもの会談）も既に去り、俺は一人、階段を降りる。

んにしても、未だに階段の昇り降りには慣れない。病院からは松葉は友達に渡して手すりに掴まってピョンピョンしていくように言われているが、友達とかいないし。そして、友達いないんですけど……なんていくらなんでも言えるわけもなかった。それ言つて冗談だと認識されるほど辛いものもそうそうないだろう。な？ぼっちの諸君。

八幡「なっ………！」

しくつた。誰かに呼びかけるなんてことないから気がそれてしまっていた。俺は誰に呼びかけていたのだろうか。

現状の整理をしよう。右手に持つ松葉が飛んでつた、とまではいかないが、階段を滑り降りた。なんで俺より先にいくんだよ。お前は沢田君かよ。ほんと、なんであの時に置いてかれちゃったんだろ。いやまあ理由はわかってんだけどね？でもその時なんてわからなかったからすごいショックを受けていたことを覚えている……

「何をしているの？」

八幡「え？」

冷たくも柔らかい、そして綺麗な声が後ろから聞こえて振り返った俺は、

「？」

……………。

見惚れていた。ただ、見惚れていた。

長く、流れるように綺麗な黒髪。細く、ガラスのごとく透き通った肌。そして、それらを何倍にも見せるほどの、整った顔立ち。まさしく美少女という代名詞が適切な、少し首を傾げている、その少女に。

八幡「え、あ、その…えっと……………」

「かばんと松葉杖、持ってあげるから降りなさい」

八幡「っ……………あ、す…すみません……………」

そして俺は彼女に荷物を手渡す。〈渡す〉よりも〈手渡す〉の方が、なんか、いいですね。

てか、学校でほんとに久々に口開いたんじゃないか？最初の頃は先生と少し話してはいたが（それでも多少しだけなのかよ）…………

そのせいだろうか。それとも見惚れていた、いや、見惚れているせいか。言葉がうまく出てこない。もともと言葉を発すること自体が少ないが、それでも、こんなにも出ないことは今までなかった。

…………だが、それについて考えることは、すぐに辞めた。

つと、そんなことを考えている場合ではない。

そそくさと俺は階段を降り、松葉を拾う。

「は、い」

俺は預けた荷物を手渡して、手渡して受け取る。

八幡「ど、ども……………」

「それよりも、危ないわよ？階段で松葉杖をつくなんて」

八幡「はあ……………それはわかっていたつもりだったんですが……………」

「こけたら大変よ。これからは気をつけなさい」

八幡「す、すみません」

「それじゃあ」

そう短く告げ、彼女は歩いていった。

早いな。まるで彼女は全然違う世界の人のように、俺の視界から消えていった。
というか、後ろにいたってことは俺のせいで進めなかったってことか。ほんと、すみません……………

八幡「あ……………」

俺は思い出してしまった。彼女にお礼を言っていないことを。今からは、もう無理だろう。松葉杖で彼女よりも早く移動できるわけがない。それに、叫ぶという選択肢も普段から声を出していない俺は選べない。

そのうち言える機会はあるだろうか。きてほしいな、ぜひとも。

記憶を掘り下げる。赤色だったよな、たしか。なら、言える機会はいずれくるだろう。俺が覚えていても彼女は忘れているだろうし、そもそも人間関係を構築できていない俺に機会が巡ってくるかは別の話なのだが……

にしても、あんな美少女がいるという情報は流れないものなのか？噂やらなんやらで聞きそうなものだがな。俺がまだ来てから時間が経ってないから聞こえてこない（もちろん盗み聞きですよ）だけか。

黒髪の美少女、ね……

—————

本日5月23日、やや曇り。

やや曇りなんて天気があるかは知らんが、まあそれ以外で言い表すのは困難であるほど、微妙な雲の量である。

この時季は太平洋側をじめつとした空気が漂う。そして気温の上昇だ。夏の暑さプラス湿気、もはや夏は脅威でしかない。ちなみに、この知識は中学の社会の地理でやった。だからよく覚えている。理科の天候でもやったつて？そんな、ハハハ、またまたご冗談を……

登校のときもちろんいち早く学校へ行く。朝の忙しいときに階段を松葉で占領とか邪魔なだけだからな。

教室では基本、読書をしているか寝たふりをしている。読書は純粹に俺の趣味だな。最近ではガガーーーーいや、まあおもしろい本を見つけたからな、はまってる。寝たふりに関してだが、決して夜更かしをして、いかがわしいことをしているわけではない。それをするのはリア充どものみである。だから、俺はしっかりと寝ている（だからってなんだだからって。そんな接続詞で繋げるんじゃねーよ）。よつて、決して寝ることはない。なら、なぜわざわざふりをするかつて？それはだな、周りに俺の存在を認識させないためだ。存在感を消す、そのためには寝るのが一番なのだ。それプラス人間観察を行うときに最も適した体勢である。

それにしても、今日は本当に騒がしい。いや、理由はいくらなんでもわかるんだけど

ね。だって、明日からテストだもん。リア充どもがワンワン騒いでいる。騒いで自分やばいアピールとか本当にうるさい。そんな暇あったら勉強しろよ。

それにしても、

……ワンワン、か。

—————

さて、今日も帰るとしよう。学校は本当に過ごしにくい。ついでにうるさいやつらは憎い。

階段も長いと感じていた最初と違って、今はもう慣れて、なんなら短くすら感じる。だが、慣れてきたと思つているときに事故は起きてしまうのだ。ほんの小さな緩み、油断が事故を生む。ドライバーの皆さんには常に細心の注意を払っていただきたいものである。

八幡「ん、しょ。よいしょ」

未だに声は出る。なんか出した方がうまくできそうな気がする。でも、省エネ主義者であるあの人はそれをやらなくていいこととしてやらないのだろう。あの考えって完全にぼっち向けだよな。友達いるし、フラグが完全にたっている美少女と過ごしてるし、俺とは全然違ってぼっちじゃないんだけど。世の中不平等であるとしみじみと思う。俺も省エネを頑張ってみよう。何が削れる？ 会話、はしてないから削れるところがない。呼吸、は必要。思考の停止、は削れそう。って、これ削ったら人間らしさが俺の中からなにひとつなくなってしまう。それは防がねばならぬ……結論、俺は省エネで生きている。なんと地球に優しいのだろうか。そろそろ国際連合（国連）はぼっち推奨を始めるべきでだろう。一人っ子政策があるなら独りっ子（ぼっちと読む）政策や、ぼっち推奨委員会とか、地球温暖化対策の仕方はいろいろとあるものである。

というどうでもいいことを考えて、テスト勉強で疲弊した脳を休ませること数分、ようやく下駄箱である。とっとと帰りたい。先週までは多少なりとも部活のうるさい音も響いていたが、いくらなんでもテスト前日は部活をやらないらしい。あくまでらしいだけである。部活というのに関わったことなんてないから確かなことかはわからんから予想ではあるが。ま、聞く人もいなかっただけだな。

靴を履き替える作業もだいぶ身についた。いやー、最初は苦労した。なにせ、怪我してない方の靴を替えるときなんて両足を浮かして松葉しか地面についてない状態だけ

らね。それも今となつては単調な作業である。てか、周りに人がいないんだから、ざら板に座つて履けばいいだけなんだけど、なんか座つてしまふと負けを認めてしまふように、体が拒絶反応をする。一体誰に、何に負けるといふのだらうか。ほんと、負けたくない相手もないっていふのは気が楽。座らない理由としては、座つたときに砂がつく、というだけだ。他意はない。でも何で砂をつけたくないんだらうか。砂くらい払えばいいんだし。まあ考えるだけ無駄か。

さて、帰つて勉強でもしよう。ところで、

……明日つてなんのテストがあるんだっけ？

—————

結局何をやればいいのかを思い出せなくて全教科やつた。といつても理系はとる気ないし、文系をやつたが、現代文は大丈夫だし、古文と社会と家庭をやつただけだ。律儀に副教科である家庭をやつてゐるあたり、なかなか優秀である。ふくきようかで漢字変換すると服強化とか出ておもしろい。身近におもしろさは存在するのだ。ぼつちのたしなみである。てかこれ俺が変換してゐるわけじゃないな。

俺はいつもどおり、教室に一番に入ったわけだが、そこでとんでもないものを眼にし

てしまう。

今日のテストに文系科目が一つもない、だと……

今日はやることがないではないか。文系科目がないとか世界の終わりだわー。

……はあ。

—————

本日5月30日、曇天。

長いテスト期間も今日で終わった。土日を挟んだからやけに長いテスト期間だった。文系科目は、まあ想定どおりできたはずだ。うむ、中学と大してテストの感じは変わらない。理系科目？なにそれおいしいの？なんてことはさすがに言わないが、まあ察してくれ。

んにしても、どうしてテストが終わった後にリア充つてのは学校に留まるんだ？邪魔で仕方ないし、うるさいし。松葉で動いてたらそれこそ目立つし迷惑をかけてしまう。今日も帰りが遅くなりそうだ。

本日6月18日、雨天。

せつかくの記念すべき日だといふのになぜ今日に限って雨なのだ。まあなんていうことはない。だって今梅雨だし、雨が降って当然である。しかし、今日くらい晴れてほしかった。今日、足の完治が言い渡された。長い間お世話になった松葉との別れを惜しむ。いやだって、ね？高校生活で一番近くにいたんだよこの松葉。そりゃあ惜しみたくもなるつてもんですよ。もつと言えはこの松葉以上に接する人なんていないだろう。

……じゃあな、松葉。

松葉との感動的な、感動的な別れを終え、これで明日から毎日朝早く家を出る必要も、授業後静まりかえるまで待つ必要も、階段で一段一段気を張って昇り降りする必要もなくなくなる。なんてー素敵なー日常ーでーしょー。

つつても怪我の影響でまだしばらくは運動するな、とのこと。それにしても、運動の定義がいまいちわからん。確か理科で呼吸とかも運動に入るとかなんとか習った覚えあるし。足に負担をかけるな、ということなのだろうが、そのくらいしつかり説明してくれないとぼっちのコミュニケーション能力じゃ理解できない。まあ俺はぼっちの中

でもコミュニケーション能力を持ったほっちだから伝わったものの、俺以外だったらほんとに呼吸止めるやつとか出てくるぞ。あれ、もしかして病院の人って対人スキルがないのか？

まあ、この時期ともなれば一学期終了に近づいたから期末テストを来週に控えている。そそくさと勉強に切り替えよう。今回は何日目に何のテストがあるかをちゃんとわかっているから前回のようにとんでもなく無駄なことはしなくてもよさそうだ。理系のテストがないということになっていかなかったのは何故だかわからない。理系科目、去れ……………

そういうえば、前回の国語学年一位と総合学年一位って誰だったんだろうか。貼り出されることもないこの学校ではそれがわからない。未だにそこらへんのうるさいやつらが噂とか立ててないし、俺の耳には届いていない。

それに、

……………彼女の名前もわかってないし。

Second / album

俺が始業式にあつた事故の詳細について、語るとしよう。

天気は晴れ、雲もまばらにあつて、非常に過ごしやすい天候だった。

俺は自転車をこいでいた。おニユーのママチャリである。スーパーの安売りで10000円で買った。こういうものくらい親に買ってもらいたかつたものだ……

そして、車一台が通れば歩行者も止まらなければいけないというほどの道幅のところ、犬を散歩している少女がいた。犬に振り回されていたというところでも光景を残して。そして案の定少女は倒れた。

悪かつたのは倒れた位置とタイミング。

倒れた位置が道路の中央じゃなければ、たまたま車が来るタイミングじゃなければ、そんな偶然が見事に合わさつた。彼女は腰を抜かして立てそうもなかつた。車はその少女に気づいたが、ブレーキを強くかけたつて間に合いそうもない。ちなみに俺はそんな厄介ごとに関わる気なんてなかつた。だから無視しようとした。

だが、結果として俺は事故に遭つている。ほんと、ね。俺の体もいうこと聞かなくなつてしまった。

ほんの、ほんの一瞬頭をちらついたりつかわらない、どこかわからない、そのに照らし出される人が誰なのか、全てが謎に包まれた光景が、ちらついてしまったから、俺は動いたのだろう。少女は中学生くらいか、それより幼いか。とにかく小さく見えた。会話してないから知らないけど。車は高級車だと誰もが思う車であった。一体どこの金持ちだよ。ひかれたからその代償として俺を養ってくれればいいのに。俺一人増えただって変わらないだろうに。

……いや、だめだな。

『……………だめだよっ』

一体誰の声なのだろうか。

—————

本日7月19日、曇天。

テスト返しの喧騒もすでに過ぎ、終業式に臨む。てかなに、なんでリア充どもはたか

だか一ヶ月会えないだけなのにいつも以上に会話してんの？そんな短い、つーか一瞬の別れすら悲しいのかよ。感覚おかしいだろ、どうせ連絡とか取り合うんだろ。ほんと、意味わからん。

なんてくだらないことを考え、時間を過ごす。それにしても、式のときの校長先生のお話は、校長先生のあたりはずれに影響している。いい校長だと聞いていたためになるが、悪い校長だと本当になにが言いたいのかわからない挙句に長々と時間をとる。現在の校長は後者である……

長い長い校長先生のお話も終わり、我々生徒は各教室に戻るべく、足を動かす。てかお話の内容が、要約すると“部活と勉強頑張ってください”というもの。その結論のために20分消費とかありえねえだろ。とつととホームルームやって、とつとと帰りたい。今日は両親が同僚にお呼ばれで帰ってこない。一人で自宅を満喫できるだなんて最高じゃないか。

まさか夏の課題があるとは思ひもなかった。高校生にもなってそんなもん出されたって無駄だろ。課題やったって、そもそも勉強する気のないやつはやるだけ無駄だし、真剣に取り組むやつにしろそんな枷があつたら万全の状態で勉強ができない。学校はもう少ー少ーいいや、もつと生徒のことを考えてもらいたいものである。やはり、学校というのは社会の縮図ということであっている。上からの言い分（世の中ではこれ

を命令という）は絶対だし、弱者は徒党を組んでやりすぎさなければいけない。徒党を組まないばつちはやはり最強である。

なんていう感じに浸ってたらいつの間にかホームルームも終わって、生徒が下駄箱に流れていった。こういう行事のあとつて最初にだーつと流れるからしばらく待機が正解。流れに身を置いて行動とかありえない。周りに流されて行動するようなやつは信用できない。

ま、俺は信用なんてされないから関係ないんだけどね。

—————

本日7月26日、晴天。

……やばい。夏の課題が終わってしまった。いやほんとに終わってしまった。うんほんと、面倒なの以外が終わったとかじゃなくて、ほんとに全部終わった。やばいでしょう。本格的に夏休みに目標がなくなった。いや、目標はあるのか。最近ブック・オンで大量にライトノベルを買ったからその消化作業がある。消化を消火にするととんでもなくかつこよくなることに気づいた。これも俺の国語力の成果だな。

実際のところ、予定より一日早く課題が終わったというだけのことだから大して俺のスケジュールに影響がない。あるのは明日に“課題終了”という文字を消してその日を買つ白にするという作業があるのだが、それでも大した影響ではない。あえて触れていなかったが、夏休みのスケジュールはそれ以降真っ白である。

—————

本日9月1日、晴天。

おい、夏休みの行動はどうした。とかいう質問に対しての返答をあらかじめしておく。

なんにもなかった。

罰ゲームで女の子が遊びに誘ってくれることも、親と一緒に旅行というのも、本当になにもなかった。ちなみに親と一緒にと言ったが、別に両親だけで行ったわけでもない。ので勘違いしないように。夏休みの俺の行動だが、7時起床。ゲーム。8時朝食。食べ終わり次第勉強。10時からゲーム。12時昼食。食べ終わり次第読書。14時から勉強。……

説明が面倒になった。まあという感じに毎日同じことを繰り返していたわけだ。

始業式。それはこれからの憂鬱な日常に対して悲しむという日であると同時に、今までの休みの反省を余儀なくさせられる日だ。しかも校長先生のやたら長い話を聞かされる。校長の自己満足のために生徒を使うのはやめていただきたい。心の中でそう祈る日である。久々に会った友人（笑）たちとの会話を楽しんでいる騒がしいやつら。別に俺は彼らを否定などしていない。騒ごうと、喚ごうと、それは彼らの自由だ、人権が保障されている。俺が許せないのはあいつらの会話の中身にある。いやほんとはもつとあるんだけどね。その中身というのが、俺課題やつてねーわーと自慢げにしゃべって、それに対して俺もだわーとか、そーれやばくね？とか課題を完全に会話のネタにしていることだ。話のネタにされたことのないお前らにはこの気持ちにはわかるまい。影で散々に言われ、さらに聞こえるような声でクスクス笑う。これをされたときの精神的ダメージを知らないお前のその会話はすごく不愉快だ。つまり俺は課題に同情しているのだ。

ちなみにそういったやつらの会話の中には明日から始まる実力テストの話はなかった。存在すら忘れられてる実力テスト、俺みたいで、ほんと、かわいそう……



本日9月7日、雨天。

俺が一学期に見つけた昼飯を食べる場所、通称：ベストプレイスの場所は外。こんな天気では教室で食べるほかない。そうすると、本来は静かに食べなければ行儀の悪い食事、騒がしい。だが、この日はこの騒がしさが功を奏した。ようやく噂やらなんやらが回り始めたというこの時期、学年一位を毎回、しかも全教科とついているやつがいるという情報が俺の耳に入った。そして、その人は女の子でさらに美少女だとか。J組だから縁なさそうだからチラリと見ておこう。噂が流れ始めたということは人だからできていないはずだから、その女の子というのが誰かというのも容易にわかる。人ごみは利用の仕方によつてはとんでもなく役に立つことがあるということをいい加減、世の中のぼっちは覚えた方がいい。

思い立ったが吉日、すぐ行動に移すべし。

J組の近くに来たが、人ごみがすごい。学年一位というだけでも見に行くだろうが、それが美少女ともなればとんでもない人の量になるのは予想済みではあるが、やはり予想していてもあてられるな。いざ、臆せず前へ。

—————

本日9月14日、晴天。

女の子は見たことのある人物だった。というか話したことのある人物だった。階段で助けてくれた女の子、黒髪の美少女だった。彼女が学年一位、か。これは、

八幡「はあ………」

ため息しか出ない。あんな、中心人物に俺が近づけるわけもない。お礼は、言えそうにない。そんなことを考え、少し寂しく、悲しくなった。まあでも仕方ない。元からそういう運命だったというだけだ。別にラブコメに期待なんてしていない。だが、彼女の見たあのとときの柔らかさ表情を見ることができないというのが少し残念なのと、やはりお礼すら言えないのは、味が悪い。学年一位なんてちやほやされるのだ。つまり俺は無関係で対照的な存在。だが、彼女の去り方は、そういう違う世界の人という感覚ではなかった気もするが。なんて、期待してるだけか。いい加減諦めも覚えないと。希望なんて世の中にあつていいものではない。そんなものを持っては、

………また自分に失望することになる。

本日9月22日、雨天。

今日は居残りで先生に呼び出しをくらった。なぜ呼び出されたかという、あまりにも文理の点数に差があるから、ということだ。国公立にいきたいならまずいと言われたが、私立にいくと言ったらそれでも数学は頑張つてやれよと言われて返された。そんな帰り道。

紅葉も、少し夏の暑さを残す涼やかな風も、秋を感じさせる。秋という季節は実にくらぎつたい。気温、湿度、景色、その他諸々自然はいいものを提供してくれるのに、それに対して文化祭などの学校行事で地球を破壊する人間。まったく、なぜ地球に悪いことをするんだ。これだから複数で行動をする人間は。やはり国連はぼっち推奨委員会を作つて積極的にぼっちを推めるべきである。

「好きです！付き合ってください！」

ちつ。せつかくぼっちを広めるための策略（妄想と読む）を練っていたのに。下駄箱で告白とかすごい度胸あるよな。誰に聞かれてるかわかったもんじやない。ソースは俺。誰もいないはずの校舎、下駄箱で告白したら周りでソワソワ、コソコソ、ヒソヒソ、ククククという声が出てきた。ククククとか絶対曹長がいるだろ。これわかるかな？と、相手のお方は誰かな？ちなみに告げたのは男子。

「いめんなさい」

学年で知らない者はいないだろう。学年一位の頭を持つと共に、学校一の外見を持つ少女。

てか返答が早い。秒も入らず、というか考える間もない返答。さらにすぐ帰っていった。そしてあの声の冷たさ。絶対零度を発した彼女は、彼女の声は、とても冷たかった。それにしても、彼女の声ってこんなに、その、なに？柔らかさがなかったか？硬く冷たい、その声は冷酷と言って違いはない。こんな声での会話は記憶にない。

さて、そんな空気の中にいる必要もないので俺もとつと帰るとしよう。

「なにあの態度」

「私の柏木君……………」

「何様のつもりなのよ」

そんな三人の声が陰から聞こえたことに関して、触れる気はない。

—————

本日9月23日、晴天。

俺は今世紀（今月と読む）、最大の失態を犯す。

時計の針が停滞していることに気がつかなかったのだ。簡単な話が時計の電池がなくなつたということだ。だから、怪我をしていたときと同時刻に学校に着いてしまう。

だが、そのときと違う点がある。一つ目、当然のことながら俺の両手に松葉がないこと。二つ目、下駄箱に人がいること。この時間に学校にいるということは大して不思議ではない。朝練とかあるし。ただ、その人は、いや、人たちは三人で、なにやらかたまつ

て話しをしている。

「これだよね？」

「これこれ」

「人がいないうちにやろうよ」

最後の人、ちよつといいですか？俺、ここにいるんですけど。まあ気にしないんだけどね。そんな会話があり、そのうちの一人が下駄箱を開けて中にある靴を取り出した。三人は靴を履いているためどう考えても違う誰かのだ。

てか、この時間に靴があるっていうことはもうすでに誰かがいるってことか。なんか、俺、恥ずかしい……………

ま、どうでもいいや。

—————

今日の授業も終わり、これから帰るところだ。とつとと帰ろうと、下駄箱目指して歩みを進める。

……ただなんとなく、今朝の靴の持ち主が気になって誰かくらいの確認はしておく。特に意味はない。

十数分の後、靴の入っていない、つまり空の下駄箱を開けたのは、彼女、学年一の才女だった。その彼女は下駄箱を開けたあとにすぐ、反転をして進んだ。

俺は特に何かをする気はない。どうしてわざわざ好き好んで面倒ごとに巻き込まれなければいけない。関係のない人のためにわざわざ行動する気もない。関係ない人、ね。

……そういえば今日つてこのあと特に用事つてなかったよな。そういえばまだ学校の探索つてしてなかったし。探索つて心をくすぐるしな。

—————

たまたま、学校探索の過程で彼女の靴を見つけたから彼女の下駄箱に入れる。まあさすがに事情を知ってるわけだし。知らん振りをする方が無理やりだし。

あつた場所は人通りの少ない学校裏の茂みの中。昨日の雨のせいで草は濡れていた。

まあ見つけてしまったもんだから取ってきた。俺の靴やズボンに泥も付いたし、結果としては損ばかり。持っていたタオルで靴の水分はできるだけ取った。靴は何も悪くないしかわいそうだからな。

言っておくが、学校裏には来たことなかったから来たただけだ。ここが隠しやすそうとかいう予想はもちろん立ててない。

さて、帰るか。外に向かって歩く。そのときに、

「……………ありがとう」

なんて小さな声が後ろから聞こえたが、俺には関係ないので、その声を響く足音で聞き消した。

故意的に俺は靴を探したわけではないから恩は返した、ということにはならない、する気もないが、それでも、まあこれで借りた恩の利息分は返した、ということだ。

彼女のことだ。これからは同じことをされないように対策はとるだろう。よかったですわねっと。

帰り道は少し足取りが軽かったということは、単なる気のせいだと思う。自転車だしな。

Third / album

今回は入院生活について話すとしよう。

入院期間は二週間くらいか？よく憶えていない。その間、家族はちゃんと来てくれた、3日に一度くらいのペースで。仕事忙しいから仕方ないんだけどさ……

とは言うものの、俺が事故のあと目覚めたときには泣いて喜んでくれた。なんであそこまで感情が出ていたかの理由はまったくわからないが。

入院しているときにお見舞いに来たのは家族と、助けた女の子とその家族、車を運転していた人とその関係者の計7人。友達なんていない、どころか今連絡のとれる人すらいない状態。俺の価値は7人である。いや、むしろ7人も来てくれて俺は嬉しいんだよ？

車を運転していた人とその関係者は一度謝りに来て、親とお金関係の話しをしていたらしいし、女の子とその家族に関して、俺は見えていない。親から聞いたが、俺が寝てるときに何度も来てくれたということだ。会って話しくらいしたかった。女の子がかわいかったからとかそういうことではなくて。いや、かわいかったんだけどね。さすがに中学生に手は出さない。

ちなみに名前は“由比ヶ浜”というらしい。それ以外の情報といえば、髪が黒くておとなしめな感じだった。というくらいか。まああと、推測にはなるが犬にやられたつてことは力自体はないのだろう。

車について話しておくくと黒塗りの高級車。これ以外の情報はないし、そんな車に縁がないんだからこれ以上の情報も得ようがない。

それにしても、ほんとよく助かったよな俺。中学の柔道の授業で相手がいなかったから受け身をやりまくっただけのことはある。とは言っても片手に女の子を抱いて、さらに傷つけないようにバランスをとるのに必死で大した受け身はできなかった。結果助かってるんだからいいんだけどな。

—————

本日10月2日、曇天。

文化祭の準備も最終段階に入った。校舎はその飾りで染まり、文化祭一色となった。クラスでの俺の役割といえは小道具の作成である。その小道具だが、飾るのは俺じゃないから作りっぱなしでいいあたり、かなり楽である。

今日は明日の文化祭に向けてどのクラスも盛り上がっている。うるさい。

今日は家に誰もいない。また同僚に誘われたとか。まあ俺も一人でいたいし、ちようどいいんだけどな。

—————

本日10月3日、曇天。

忌まわしき文化祭当日である。俺の当日の仕事は特にならない。仕事はしたくないが、一緒に回る人がいない以上、居場所がない。ベストプレイスですら、どこぞの奴らに占領されていた。

どこで時間を潰すか探していると、荷物の散乱している踊り場、階段の一番上に着いた。ちなみに屋上の扉がある。校則で屋上への立ち入り禁止というのはなかったはずだから、屋上へ行こう。扉を開ける。屋上に来たのは初めてだ。なんか、こう、普通だな。想像通りの広さ、想像通りのフェンスの高さ、想像通りの素材、そして想像通りの景色。全てが全て想像通りだった。

さて、床もいい感じの素材だし、ここで寝よう。晴れだと寝れないだろうが、今日陽

は出ていない。寝るには適した環境だ。さて、眠たくなってきた……

八幡「ふあああ………」

よく寝た。ふむ、ここはなかなかいいな。なかなかいい、な………え？なんで？なんで？動揺が抑え切れない。いや、あのね、だつてね。

………女の子が横で寝てるんだもん。

まったく状況が把握できてない。

顔の距離30cm弱。少し口を開けて呼吸。ゆっくりと肩で呼吸。制服が少し着崩れている。首とその周りの白い肌が見える。

あれ？わりと把握できてる。そして気づいた、この状況はまずいと。この場では撤退が最善手。逃げよう。

「……………うん

……………あれ？私寝ちやつたんだ」

起きた。俺の勤が告げる、もう手遅れだと。てか、なんか見たことある人だな。どこで見た？

「ごめんね？それからありがとう、私が寝てたから起こさないでくれて」

違う違う。関わらないために起こさなかつたんだ。

だが彼女は誤解したまま話を続ける。

「あー私、城廻めぐりっ、よろしくね。君の名前は？」

………なんだろうか。このポワポワフワフワしたほんわか雰囲気は。この屋上という空間が、彼女から発せられるほんわか雰囲気に含まれる！

八幡「ひ、比企谷です」

こういう会話は慣れない。話掛けられること自体慣れていないからというのが理由

だが、それプラスに彼女が徐々に距離を詰めてきているというのが頭を混乱させる。

めぐり「比企谷君、ね。よろしくねっ！」

八幡「よ、よろしく願います……………」

軽い会釈をする。そのとき下をチラリと見て、彼女の履いているスリッパの色が緑と
いうことがわかった。俺の一つ上の学年、2年生だ。

めぐり「ねえねえ比企谷君。こんなところでなにしてたの？」

八幡「ええと、昼寝です」

めぐり「文化祭なの？」

八幡「やることないので……………」

学校で一番盛り上がる行事の文化祭でやることがないってすごいよな。自慢できる。する気もする相手もないけどね。

めぐり「へえ。あ！ならちよつと手伝ってくれる？」

八幡「なにをでしようか」

めぐり「ちよつとした仕事を、ねっ」

ねっ、とかすごいかわいい。ほんわか雰囲気と合ってるし。いかんいかん、意識を戻さねば。

なんだろうちよつとした仕事って。掃除とかゴミ捨てみたいな雑用ならともかく、いや待てよ。人の死体の掃除とかゴミ捨てとかは無理だな。ならやれることないな。この先輩をなんだと思ってるのだろう。

八幡「具体的にお願いします」

めぐり「う〜んとね〜、生徒会で私が担当してる仕事があるんだけどね。力仕事で、その、手伝ってくれない、かな？」

そんな上目遣いをしないでください。そういう行動が勘違いを招くんですよ。うっかり好きになっちゃうでしょうかが！

いや待て、聞き慣れん言葉が出てきた。生徒会？あ、そういえばこの先輩って、

八幡「……………もしかして副会長？」

めぐり「あ〜。やっと気づいてくれたね〜」

どうりで見たことあるわけだ。この間（一学期）演説会やってたな。前期生徒会副会長、名前は————あれ？なんだっけ。さつき名乗ってくれたのにな。

めぐり「それで、その、やってくれる？」

八幡「わ、わかりました。手伝いますよ、先輩」

めぐり「ありがとう！」

八幡「それじゃ、ささつと済ませましょう」

めぐり「うんっ！付いてきてね」

八幡「わかりました」

さてと、これで俺は文化祭に貢献できるわけだ。イヤーコウエイダナー。

—————

八幡「そういえば先輩。どうして屋上で寝てたんですか？」

めぐり「えつとね、屋上からの景色を見てみたくて行ったらかっこいい男の人がいたから横から見てたんだけど、眠たくなっちゃって。それで、そのかっこいい人が起きた

らいたんだけど、眼のせいで少し残念だった」

八幡「そうですか……」

残念で。いや自分でも眼があれだってことは自覚あるから気にしないけど、ここまでストレートに言われるってのもどうなんだろうか。

めぐり「あ！ごめんね、その……あ、あと文化祭がちよつと楽しくなくて。だから屋上に来たんだよ！」

八幡「いや、気にしてないんですよ。というか、楽しくないってどういうことですか？すごい盛り上がってますけど」

めぐり「ええと、まあいろいろあつてさ。だから、私が来年会長になって、全員が楽しめる文化祭にするんだ！」

八幡「会長になれば、ですよね？」

めぐり「そんな意地悪言わないでよ、比企谷君」

八幡「まあ、頑張ってください」

めぐり「うん！」

危うく惚れそうになる。そんな笑顔を俺に見せないでください。笑顔、か。そういえば彼女、学年一の才女の笑顔がかわいいという噂は流れてないな。まあいちいちそんな噂立てるまでもないことというだけかもしれないが。

……それから、なぜほんわか雰囲気が一瞬なくなったのだろうか。

—————

めぐり「比企谷君！今日はありがとね！」

いくつか少し大きめなダンボールを運んだだけだ。

八幡「いえ、大したことじゃありませんよ」

それに、そのおかげで文化祭の閉会式に並ばなくて済んだのだから、むしろありがとうございました。

めぐり「ねえ比企谷君。今日生徒会で打ち上げやるんだけど、比企谷君も来てくれな
い？お礼もしたいしさ」

八幡「いや、俺はそういうところに行きたくないですし、お礼もいらないますよ」

めぐり「お礼したいんだけどな」

ははは、と乾いた笑いを奏でる先輩。ちつ、どうすればいいんだよ。

八幡「本当に気にしなくていいですよ。先輩は打ち上げ楽しんできてください」

めぐり「えっ？私行かないよ？」

八幡「……………はい？」

いやいやいや、打ち上げどうこう言ってたじゃん。なんで先輩行かないの？もう忘れちゃったの？

めぐり「私、今の生徒会、嫌いなんだ」

思ってもみなかった理由だった。先輩が生徒会を嫌い？あんなにすぐ動いていたのに、あんなに仕事をこなしてたのに、あんなに頑張っていたのに。そんな先輩がどうして。なら、なんで先輩は生徒会に身を置いているんだ。

……………先輩の顔は暗かった。屋上や、ついさっきまであつた柔らかい雰囲気はない。さきほど一瞬なくなったときに感じた空気だ。彼女は、一体どうしたというんだ。

八幡「どうして、ですか」

めぐり「ごめんね、それは言えないよ」

彼女の抱える闇だ。ただ単に生徒会の人が好きだとか、そういうつまらない話ではない。いや、嫌いなんだろうが、嫌いのレベルが違う。先輩の嫌いは、嫌いという言葉よりも、憎いという言葉の方が適切だ。

……こういう使い方はしたくないが、いた仕方ない。

八幡「先輩」

めぐり「な、なに？」

八幡「お礼、してくれるんですよね？」

めぐり「そうだけど」

八幡「なら、そのお礼は先輩が生徒会が嫌いな理由を教えるということ、いいですか？」

めぐり「比企谷君って、卑怯なんだね」

卑怯、か。俺はこれを卑怯だから使いたくないわけじゃない。もつと単純な理由だ。恩を与えたくてやった行動じゃないのに恩を返してくれる、というのが納得いかないだけだ。俺がその人に恩を与える気で行動したのならばその返ってくる恩は受け取るの
だろうけど。

めぐり「うん、わかった」

決して納得した顔ではない。すごく嫌そうな顔だ。それでもいい、俺には関係ない。事実のみが必要なのだ。

めぐり「……いじめが、起きてる、の」

いじめ。一方的に少数勢力を物理的に潰すことである。少数勢力は学校でいえば一人、多数勢力は三人以上のケースが多い。なぜ三人かというと、やりやすいからだ。少

数勢力の人間はいじめから逃げない理由はいたつて簡単だ。逃げられないのだ。いじめが生活の一つとして染み付くのだ。嫌だ嫌だ、そう思えば思うほどその呪縛は強くなる。そして、日々大きくなるいじめのレベル。少数勢力はそこから逃げるために自殺をする人が多い。だがいじめた側に罪はかからない。証拠がない、ただそれだけだ。いじめられている、なんて誰にも言えるわけがない。言えるようなやつはそもそも少数勢力に入る失態はしない。いじめから逃げ出す方法はもう一つ。無関心になることである。なにをされても、なにが起きても反応をしないことである。反応がなくなればつまらなくなり、勝手にいじめはなくなる。だが、その考えに行き着くには多大なる犠牲が伴うことになるが。さらに実行するともなると、無関心の制御ができなくなつて、興味そのものを人に対して持たなくなるだろう。

めぐり「生徒会の三年生三人が、一年生の一人、を……」

腕に力がこもり、体中が震えている先輩。今にも崩れそうな、弱い脚。声は震えて泣き声ともとれるほど湿つた声だ。

おそらく、この先輩は何かやろうとしたのだろう。だが、先輩は無力だった。止めることもできないし、先生に言ったところで相手にしてもらえなかつたんだろう。

めぐり「一年生は、生徒会にも、関係ないのに……………」

八幡「名前は？」

めぐり「えっ？」

八幡「主犯の、名前は何て言うんですか」

めぐり「会長の、田中、先輩」

八幡「わかりました」

めぐり「ち、ちよつと！何する気なの！私が、私がやるから何するか、教えてよ！」

助けたいという気持ちは本物なのだろう。無力な自分に失望も、絶望も、全てを味わったんだろう。それでもなお、いじめをどうにかしたい。そんな優しい先輩に、何か

させるなんてことはできない。

八幡「俺一人でできることですから先輩は手を出さなくていいですよ」

めぐり「嫌だよ、そんなの。私が止めないと、だめなの」

八幡「先輩はそのいじめられてる人を守ってあげてくださいよ。俺が止めるのは主犯だけです。あと二人はどうしようもありませんので」

めぐり「うん、わかったよ」

………嘘は胸が痛くなる。

—————

本日10月5日、晴天。

文化祭のパンフレットに会長である田中の顔やクラスが載っていたから目的の達成は容易いな。それにしても、俺がここまで動くとは。いじめという言葉に反応をしたのだろうか。自分がされたことがあるから動いた？そんなばかな。俺の性格上、俺の遭った嫌なことは他人も遭ってしまえということを思うはず。なら、なにに反応したんだ？先輩に一目惚れ？充分ありえるから困る。いや、一目惚れでなくとも普通に好きになったとか。それが一番可能性が高いが、なんかパツとしない。まあいいや、ひとまずその話は置いておこう。集中集中。

おつと田中がクラスから出てきた。さてと、シャーペンはどこだったかなとポケットを探る。

八幡「いつけね」

シャーペンを落としてしまった。あーこれは大失態。いやはや恥ずかしい。

落としたのは先輩の前。

………いいタイミングだ。

田中「痛っ」

おいおいどーしたんですか？突然叫んで。まあどれもこれも、俺がやったことなんだけどな。

簡単なことだ。シャーペン拾って立ち上がるときに田中の足をかけて転ばした、ただそれだけのことだ。

八幡「あ、どうもすみません」

田中「てめえ、土下座して謝れ」

八幡「それでは失礼します」

軽く会釈。俺ほんと礼儀正しい。こんなやつにも会釈するとか。

田中「このやろ！」

八幡 「ぐはっ!?？」

鳩尾にグー入れてきやがったこいつ。鳩尾は呼吸を止めるボディブローだぞ。シャーペン落としたよ、殴られた拍子に。さて、ここからが俺のターン。相手が暴力に打って出たのだ。さて、俺も次の行動に移るかな。

八幡 「先輩」

田中 「なんだ」

八幡 「ストレスか何かですか? いきなり殴ってきて。情けないですね」

田中 「んだと」

八幡 「それじゃ、先輩さようなら」

ちやちやっと逃げようそうしよう。逃げ切れれば俺の勝ち。めぐり先輩の悩みも解

決。完璧だ。

さて、逃げ切ったことだし、俺への被害を最小限にとどめる努力でもしよう。幸い、今日は文化祭の片付けということで授業がないから大した荷物はない。

スリッパを袋に入れていざ帰らん。まああれだな。田中が奇妙な人脈を持ってなければいいんだが、たぶん大丈夫だろう。いくらなんでも始まったばかりの学校生活、目立ちたくはない。

10月13日、曇天。

今日はいい感じの天気ではあるが、午後から雨予報。だから電車で来た。午後といつても夕方を少し回れば止むらしいが、まあ念のためだ。最近はどこどこで寒さを感じるようになっており、もうすぐ冬なのかと憂鬱になる。

田中を引っ掛けて一週間。毎日毎日朝から下駄箱に張り込みをされている。まったく、よく懲りないものだ。むしろ感心する。いやしないな、そんな労力の無駄使い。だが俺は一度も見つかっていない。もともと常時発動スキルの存在感を消すものがあるから見つかりにくい。さらに相手の隙を見て行動してるから見つかるわけがない。ミステイクションとエンペラーアイを同時に使ってるみたいなものだ。バスケット始めようかな、いややめとこう。チームプレイが俺にできるわけがない。

—————

今日の授業も終わり、現在雨が降っている。空を長年見続けたからわかる。今日は止まないな。だが、あと一時間で弱くなるな。なら待つていよう。ほんと自転車で来なくてよかったー。

ほんとに一時間で弱くなったよ。つっても自転車で帰れるかと問われたら無理と答えるけどな。

そんな日の帰り、下駄箱に知り合いがいた。

文化祭の日に屋上で話したあの、ええと、ほんわか先輩だ。名前が出てこん。しか

しなんだろう、突っ立っていて、さらに傘を持ってないってことは忘れたのか？なら声でもかけて傘を貸すか。幸運なことに誰も周りにはいないし。

話しかけようと、近づく。

めぐり「やっぱり頭の回転がいい人って雨が弱くなることもわかるのかな。それとも、見え方が違うのかな」

いきなりなんの話だ？誰に向かって話してるんだ？俺には見えないなにか、かな？妖とか見えるってことか先輩は。とんでもない方向に予想が飛んでったな。

そして先輩は、ゆっくりと振り返る。

めぐり「ねえ、比企谷君」

屋上で感じたほんわかかな雰囲気でも、いじめのことを話していたときのような暗い雰囲気でもなく、ただ冷たい表情で、彼女はそう言った。

Fourth / album

めぐり「ねえ、比企谷君」

八幡「何してるんですか？こんなところ……」

めぐり「比企谷君、田中先輩に何したの？」

こちらの質問には聞く耳持たず、か。ここで無視して帰ってもいいんだが、どうしたものか。何したって聞かれても困るんだけど。

八幡「何もしてませんよ？」

これは明らかな嘘。だが、胸が痛くなることはない。なぜなら、向こうも嘘だと知っているから、わかっているから。お互いに嘘だとわかっていれば痛むことはない。先輩の、目が、態度が、それをわからせてくる。

ちなみに、俺は嘘が好きだ。善人者を騙す嘘は嫌いだが、悪人者を騙す嘘は好きだ。この世の中の大半の人間が悪人者だ。俺は悪に嘘をつく時は胸が痛むことはない。しかし、今日の前にいる先輩は、

「……善人者なのだ。」

めぐり「質問に答えて」

八幡「こかせたんですよ、足を掛けて」

めぐり「それで？」

八幡「何がですか？」

めぐり「それじゃ、先輩は攻撃の対象を変えない」

先輩はそう言葉を発したが、目が俺を刺す。言葉なんていらないうほほどに、その目は語る。ほんとは先輩は言葉を発してなどいなかったかと思うほどに、その目は訴え

る。

八幡「質問には答えました。俺は雨が弱くなってるうちに帰りたいで、もう帰りますね」

そう言い、俺は先輩の横を通る。通るが、通り切れなかった。先輩の右手が、俺の右袖を掴んだ。かわいい女の子の袖をキュツと掴まれるのは非常に嬉しいが、この状況でやられても困るだけだ。振り払うのはあまり好きではないが（したことないけど）、致し方ない。

だが、俺は気づいてしまった。下唇を噛んで悔しそうに、そして泣き崩れそうな表情を。目に溜まる涙に俺の眼を含み顔を映している。掴んでいる袖も小刻みに揺れている。

めぐり「……………なんで、どうやったの……………」

歯を強く噛んで、そう言った先輩。もう力はなく、袖も揺れなくなつて、彼女は崩れ落ちていた。

ちっ…………

八幡「先輩、傘、忘れたんですか」

めぐり「……………忘れたよ」

八幡「傘入って行きますか？俺電車なんで駅に行きますけど」

めぐり「……………あ…えつと…よ、よろしくお願いします……………」

そんな申し訳なさそうにされても困るんですが。

まあ先輩も、俺と帰るってことは何か話すと思ってるのだろう。俺も先輩にあんなことされたせいで話す気になったから、それでいいんだが、あれだね。

……………女の子と同じ傘に入るってすごいことしてるよね。

—————

道中

学校から出たが、俺も、そして先輩も、口を開くことはない。先輩は俺が話してくれるのを待っているのだろう。俺は話すタイミングを計っている。

信号が変わる2秒前。

これがベストだ。実際はいつだって変わらないのだが、俺の精神の問題だ。誤魔化しや嘘は動いてないときれいには出てこないからだ。おそらく、違う動作でもしながらじゃなければ言葉がないのだ。万が一、嘘をついたり誤魔化したりするときのため。

右手に持つ傘が粒を落とす音を聞き取れ、その不定期に聞こえていたリズムは一定になっていた。

そのときは、ベストなタイミングは、来た。なら話すでしょう。

八幡「シャーペン落としていきました」

めぐり「うん……えっ、それだけ？」

八幡「俺の名前付きの、ですけどね」

めぐり「本当にそれだけなの!?!?」

先輩。同じ傘に入っていてただでさえ顔やら体やら近いのにさらに近寄らないでください。髪の毛がふわっと揺れてシャンプーの匂いが嗅覚を刺激するんですが。うわあー、いい匂いだー。うんうん、邪が大きくなってきたやばいな。けど、先輩さつきまで涙溜めてたから目を赤いし、頬をほんのり赤みを帯びてるし、仕方ないよね。

ふうと一息ついて、これから話す内容をまとめる。と同時に間を作る。息と間は精神を落ち着かせるのに適した行動だよな。

自分のやったことのネタを話すのは嫌なんだけど、先輩は逃してくれないんだろうな。どこまで話すか。全部でいいか?

八幡「順番に説明しますね。俺が先ば、ええと、田中のクラスに行つて田中を怒らす。それによって興奮状態にします。それで一発殴らすわけです。鳩尾に入れられたのは予想外でしたが。公衆の面前でそんなことをした田中は軽いパニック状態が追加。俺がすぐ逃げたせいで目標物の損失。だがそこには俺の落としたシャーペンがあり、名前

もある。これでチェックです。精神の不安定な田中はそれを拾って報復に来る。これでチェックメイトです」

我ながらよくもまあこんな長い話ができただと褒めてやりたい。まあ褒めるんだけどね。しかし、振り返ってみるとけっこう運要素に頼ってたな。成功したからいいんだけど。

それから先輩、いい加減口を閉じてください。驚いてる時間長いですよ。

めぐり「そんな方法、よく思いついたね……」

感嘆を表している先輩。そんなに驚かれるほどのことでもないと思うのだが。まあでも、ひらめきには運がからんでくるって言うし、あながち否定もできないか。そもそも、このやり方は最善ではない解決手段だし、いや違うか。解決したわけではないかもしれない。今は俺を標的にしているが、いついじめられていた一年生に標的が戻るかわからない。なら俺は標的が戻らないようにちゃんと攻撃を受ける必要があるんじゃないのか。策に相手をはめて、いい気になってただけじゃないのか。一体、俺は何をしていたのだろうか。まあだが、相手が三年生である以上、これから何か問題を起こすこ

ともないだろうから、今回はたまたま大丈夫なのであろうが。

八幡「普通は思いつかないんじゃないですか？」

めぐり「比企谷君は普通じゃないってこと？」

八幡「普通だったなら文化祭なのに屋上で寝たりしませんよ」

めぐり「ほんとだねっ」

ふふつと笑い、先輩は笑顔に戻った。あの、ほんわか雰囲気だ。彼女の持つ、彼女特有の雰囲気、空気。世の中の闇を受け止めることも、受け入れることもできない、そんな彼女の本来の雰囲気。俺は、そんな空間にいることは、まあ、

……嫌いではない、な。

めぐり「あ、駅ついたね」

八幡「そうですね」

めぐり「傘ありがとねっ」

八幡「いや、まだ帰り道あるでしょ。先輩が降りる駅から家までずぶ濡れになっちゃいますよ」

めぐり「えっ!!? 家まで送ってくれるの!!?」

八幡「勘違いしないでくださいよ。俺を待つてたせいで傘を学校から借りられなかったんでしょから、その責任を果たすだけですよ」

学校には傘を貸してくれる機関がある。生徒指導部だったか、確かそんなところだ。俺が知ってて生徒会にいる先輩が知らないわけでもないし。だが、俺を待つていた先輩は借りてる時間すらなかった。俺がいつ帰るかなんて、わかるわけがないからだ。先輩の立っていた足元の砂や泥の量などからそういう推測が立てられる。あくまで推測だから事実ではないことも、もちろん考えられるが。

めぐり「優しいね、比企谷君は」

八幡「責任であつて優しさではないですよ」

めぐり「それでもいいよ」

八幡「先輩、どっち方面ですか？」

これ以上先輩のほんわか雰囲気の中で、先輩のペースで、話なんてしてたら余計なことでまで話しそうになってしまう。俺は関係ないこと、かつ必要なことで話を遮断した。

めぐり「私こっち方面だよ」

八幡「わかりました」

いやはや助かった。いくらなんでも真逆の方向とかだったら心が折れてた。という

考えが浮かぶということは、けっこう無責任な発言をしていたということになるな。

車内はいい時間だったらしく、かなり空いていた。だから俺と先輩は隣り合って座る。ちよこん。

めぐり「比企谷君」

八幡「なんですか？」

めぐり「ごめんね。それから、ありがとっ」

文化祭の日、屋上で初めて言葉を交わしたときのような、そのときと同じような笑顔で、先輩はそう言った。ようなというのは、先輩が他人に見せる顔ではなかったことだ。親しい人に、仲の良い人に、向ける顔と言葉のリズム。彼女の空間に吸い込まれてしまいかねない。体の中から高い温度を発し、血をはやく巡らせる。それは、少し寒かった車内での温度調節をするかのごとく、全身に流れる。

俺は返事の代わりに眼を瞑り、顔の向きを直した。

静かな空間は、俺は好きだ。好きだ。できることなら誰かといるときも、静かな空間に苦痛を感じず、むしろ心地良いと、そう思いたい。そう思える人と、一緒にいたい。だげどさ。

……先輩、なんで寝てんすか。

頭を傾けて俺の肩に頭を任せる。それだけならまだいい。いや、いいわけではないのだが、そんなことよりも、大きいことがある。先輩が、俺の腕に、両腕を、絡ませてる。超柔らかい。制服は俺も先輩も半袖。肌が密着して、そよプニプニした感触を俺の腕に伝える。てか先輩、柔らかいんですけど。先輩は着やせするタイプなのか…なんてものすごく貴重なゲフンゲフン。今現在必要ではない情報が手に入った。

結論、心臓の鼓動がやばい。じゃなくて、先輩がどこで降りるかわからないから起こしようがない。どすんのこれ。

という結論があつたが、先輩の胸ポケットに幸運なことに生徒手帳が入っていた。これは幸運だよな。……二つの意味で。

それでは先輩。生徒手帳取りますねー。ニヤニヤ……

すーっと手を伸ばす、先輩の胸に。間違えた。先輩の胸ポケットに。生徒手帳をどう

やつて取ろうか。できる限り親指と人差し指を広げて当たる面積を……………

は！いかんいかん。欲を捨てろ、比企谷八幡。ここは公共交通機関だぞ。寝ている先輩に手を出せば俺は社会的にまずいことになる。今は諦めておとなしく生徒手帳だけを取ろう。今はつてなんだ今はつて。

ふむふむ。この住所だと俺の降りる駅の一つ前か。んで、あと2駅。起きるかな？

—————

めぐり「んう……………あれ……………？私……………」

目を擦りながら先輩は目を覚ました。なんなんだこのほんわか雰囲気は!?!? 起きたときからこんな雰囲気で作れるのか！さすが先輩だ！屋上でもこんなだった！

八幡「あ、起きましたか」

めぐり「うん。……………え！ここつて私の降りる駅過ぎちやつてるよ！」

八幡「あれ？そんなんですか？」

めぐり「そうだよー！……もしかして、私が寝てるから起こさないでくれたの？」

八幡「いや、城廻先輩がどこで降りるとか知りませんよ」

めぐり「そういえば言っけなかつたね。比企谷君っていつ降りるの？私もそこで引き返すよ」

八幡「俺も過ぎましたよ」

めぐり「やっぱり起きるまで待つててくれたの？」

八幡「いや、俺も先輩見てたら眠くなっちゃってですな」

めぐり「はははっ。私の寝顔見られちゃったんだ。どうだった？」

八幡「どうって、なにがですか？」

めぐり「かわいかった、とかそういう感想」

女の子にそんなこと聞かれるとかなんなんだよ。なんて返すの？先輩のことだからここでかわいかったですって答えても問題ないとは思うが。先輩、寝起きだから体温上がってるのはわかりますが、頬を赤くしないでください。よし、俺の答えは決まった。

八幡「先輩。駅着いたんで引き返しますよ」

めぐり「えっ、ちよっと待ってよ比企谷君」

こうやってぼかすのが一番だ。

それにしても、先輩に嘘をついたわけだが、気を使わせるよりはいいよな。たぶん、許してくれる。

………だれにだ？

めぐり「あ、私ここで降りるよ！」

八幡「わかりました」

めぐり「比企谷君はどこなの？ けっこう遅くなっちゃったけど、大丈夫？ 家の人とか心配しない？」

八幡「親は今日も残業らしいんで大丈夫ですよ。それに、ここの一つ隣ですから大して問題ないです」

めぐり「そっか！ ありがとうね」

八幡「んじゃ、とつとと帰りますか」

めぐり「うんっ！」

もうだめだ。ほんわか雰囲気体が体に染み渡る。この空間、温泉なんかよりも体への浸透度がすごいと思う。なんか眼腐りがなくなってる気がする。気がするだけだけどね！

城廻先輩の家はさつきスマホのアプリのなんとらマップで調べたが、駅から徒歩10分もかからない。ほんとに大した問題じゃないな。しかも、俺のいたい家側に10分だから降りる駅を間違えた感覚で問題ないし。

めぐり「あつ、そうだ！比企谷君、メアド教えて？」

メアド？メアドってなんだ？脳内で検索かけるから少し待って。ふむふむ。うむうむ。ほほう。メールアドレスの略か。普段聞き慣れない単語だといちいち検索かけないといけないから面倒だな。いつぐらいに聞いた？

まあいいや。んじや、教えるのは損がないだろうし（城廻先輩の場合に適應）、いいか。ということで、俺はスマホを城廻先輩に渡す。

八幡「ええ、いいですよ。はい」

めぐり「パスコードかけてないんだ……………」

八幡「俺のスマホ触る他人いけませんし」

めぐり「落としたときとか危ないって思わないの？」

八幡「落としたらそもそも終わりだと思ってるんで」

めぐり「しっかりしてるね。……………はいっ。ありがとうっ」

八幡「どうもです」

城廻先輩が「ふふっ」なんて笑って、こう続ける。

めぐり「比企谷君はやっぱ優しいね」

八幡「メアド教えただけで優しいってどういうことですか……」

めぐり「別につ、気にしないでいいよ。それじゃあ、帰ろっか。よろしくね」

八幡「わかりました」

俺は傘をさし、城廻先輩を入れて進む。彼女の指示に従って道を進む。雨の勢いはなんとなく学校を出たときよりも弱くなっていた。

めぐり「あれ？雨、止んだね」

八幡「あ、ほんとだ」

駅から出たすぐに止んだ雨。今日の天気は誰の心を映していたのだろうか。

めぐり「止んだからもういいよ」

八幡「あ、じゃあ。わかりました」

めぐり「ばいばい比企谷君」

八幡「ええ、さようなら。城廻先輩」

めぐり「これからもよろしくねっ」

俺の知る最高の笑み。それに、落ちるのに出遅れた太陽。彼女の、夕陽に照らされ染まった顔。雨上がりで道路の水たまりが、夕陽を反射させ彼女の頬をより赤く照らす。屋根が作り出すリズムもきらりと光る。少し吹いた風は心地よく、冷静な頭で、この情報を見させる。この場を支配した彼女は、自身をより美しく魅せる。そうした綺麗な彼女は、俺の鼓動をよりはやくする。

八幡「ええ、また」

そう短く告げる。夕陽のせいで顔は熱く、はやく帰りたい。俺は城廻先輩との別れを

惜しまずに足早にその場を離れた。

……いじめられてた一年生の名前聞きそびれた。

—————

比企谷君と別れて私は帰る。帰ろうとしたのに、私は彼から目が離せない。

頭に浮かんでくるんだ。

比企谷君のついた優しい嘘。何も言わなかった、彼は優しい。

めぐり「ふふっ」

思わず溢れてしまう笑い。ほんとは私の降りる駅を知っているのに。彼のスマホの履歴に私の住所があった。なんであるんだろうって思ったけど、すぐにわかっちゃった。私の生徒手帳の向きが変わってる。それでわかっちゃった。いじめのことを話したときもそう。一年生を守って、なんて言ったけど、比企谷君があんなことした？だからその一年生に被害がいくわけないのに。ほんとに優しい。捻くれた優しさを持つ彼。なんだか、今日は陽が落ちるのが遅いみたい。気温が下がらないから体温が下がって

れない。それどころか、体温が少し上がっちゃった。10月なのに、暑いな。

さあ私も帰ろう。

………なにもない、誰もいない、私の家に。

—————

本日10月31日、晴天。

文化祭が終わり、続く体育祭も終わり、そのあとの中間テストも今日、終わりを告げた。明日からは11月だ。しかしながら、11月は修学旅行がある。いや、一年の俺にはないのだが、そのときに一年と三年には遠足たるものがありまして。少し遠出をするのでございますよ。クラスごとに行きたいところを決めて、1日消費して行くんですが、行くくらいなら授業の方がいい。面倒で仕方ない。なんで平日にそんな遠出をせにやならんのだ。じゃあ休日ならいいのかって？いいわけないだろ面倒くさい。んで、その遠足でどこに行くかを今クラスで決めている。テスト終わったんだからとつと帰させろよ。こちとら疲れとんじや。勉強してないリア充どもと違って勉強に力入れとんのじや。とは言っても、俺は意見を言わないし、聞かれない。音を出さないから進行の

妨害にならないし、他人の意見に反対しないから円満に進むことができる。今日もみなさんは仲良しごっこに励んでいる。てか、進行役が私情を持ち込むとかおかしいだろ。お前のおかげで遅くなってんだよ。ほんとね。どこにでもいるよね。進行役を勝手出したのに私情を挟んで友人（笑）と話し始めたり鼻直ししたり。はやく帰りたい。

F i f t h / a l b u m

遠足と聞くと、どうしても小学生が手近で広い公園に弁当を食べに行くというのを連想してしまうが、高校の遠足はちと違う。まず交通手段。徒歩の小学生に対して、我々高校生はバスである。貸切である。そして、次に距離。小学生は手近だが、1時間くらいかけて行くのだ。さすが高校生。そう考えているリア充たち。

結論。なにが違うんだー！やってること一緒だろー！叫びてー！叫ばないけど。とまあ、こんな考えはリア充の皆様にはないわけで、純粹に楽しみに行っているのだろう。ふっ、愚か者どもが。

ただ、バスというのは非常にまずい。俺と隣、という人がかわいそうというのが大きい理由だが、そもそも隣にいない可能性も十分にあるからそれにかける。なんにせよ、一番まずいのはあまりものとして空いているところにランダムに入れられることだ。みんながわいわい騒ぎたいのに俺がその近くにいてしまうからその人たちは遠慮する。精神的に俺がきつい。クラスに溶け込んでいる俺にとつて（もちろん空気という意味ですよ）、そういう俺が原因で何かが起こるのは、きつい。

だが、今回は事件が起こった。

「あ、あの！ひ、比企谷、君……………」

机に突っ伏していた俺に声がかかる。明るい声だ。それでいて元気めな声だ。さぞかわいいた女の子なのでしょう。

てかあれ、もうみんなバス決まったのか。早くないか？こういうのってやたらめつたら時間かけるもんでしょ？そしてその時間中に決まらなくて、担任が持っている授業を一つ消費して決めるんだよな。その間俺はやることないから自習。幸せ。

まああまりが決まったとなればあとはそこに名前を書くだけだし、少し動くとしますかね。あまりものには福がある、ってね。今まであったことないけど。

あれ、なんか急に寒気が。遠いんだけど、どこからか、冷気が飛んできた。寒っ。

あ、そんなことよりも返事をしなければ。

八幡「わかりました」

ここでどうしたなんて聞けば、それに対する答えを相手に言わせてしまう。俺にわざわざ話しかけに来てくれた人に俺と会話だなんて、そんな罰ゲームを味あわせるわけに

もいかない。だから相手が言わんとすることを先に答えておく。こうすることで相手の人はすぐに俺の近くという危険地帯から安全地帯に戻れる。……………言つててなんでこんな虚しくなるんだろうか。

「えっ……………うな、なにが、なの……………？」

あれ、違ったのか？これ以外になにが解答としてあるというんだ。

仕方ない。相手の人には悪いが、面と向かつて会話をしよう。ごめんね。

と、相手を見たら、そこには美少女がいた。と思つていた時期が一瞬ありました。かわい。すごいかわい。かわいなのに、なのに、制服が男子用だ。頭真っ白。はははと渴いた笑いが脳内を駆け巡る。

いや、そんなことは今必要じゃないんだ。落ち着け。

八幡「あれ、違いましたか。ええと、何の用でしょうか？」

よし、声が出た。クラスで声を発するとか超久々。自己紹介したとき以来じゃないか？という感じに、ほんとに久々である。だが、語勢が心配だ。俺の眼の腐り加減的に少

しでも強くなってしまおうものなら相手を怖がらせて、泣かせて、クラスからの一斉砲火が俺を待っている。そのときに先生は絶対味方にならないからね、どころか完全に敵軍。俺に味方はいない。おっと、過去の闇が俺を包みきる前に意識を戻さねば。さてさて、目の前の人の反応は、っと。

「あの……………バスの、席……………と、隣……………いい、かな……………？」

なん……………だと……………。

あ、あれか。幻聴か。いやー危ない危ない。変な勘違いをするとところだったぜ。と、頭の中がすつきりしたところでまた口が開いた。

「隣、だめ……………かな……………？」

聞き間違いじゃない、だと。し、しかもなんなんだ。上目遣いで見ないでください。腐った眼に毒です。

……………てか、誰？

八幡「え、俺ですか？」

「う、うん………」

上目遣いと目そらしを交互に行う目の前の彼。はたして彼でいいのだろうか？一応、彼（？）としておこう。

八幡「あ、はい。いいですよ」

「あ、ありがとう」

ほつと彼（？）は撫で下ろした。

ぐつ………なんなんだこの破壊力は。もうやばい。なんか、とてもやばい。だつてさ。お礼を言つて黒板に名前を書きに行くときに小さく「やった」って呟くんだよ？もうやばいよ？

黒板を眺めていたら（断じて彼（？）を見ていたわけではない。そりやあたままたま視界に入ってるわけだが、べべ別にガン見とかしてないし？）、比企谷の隣に、戸塚

と書かれた。戸塚というのか。

なんであんなに字うまいんだろう。なんであんなに腕細いんだろう。なんであんなに肌白いんだろう。なんであんなにかわいいんだろう。なんであんなに……

やばい。ほんとにやばい。頭でなんでが90%以上を占めていた。そんな邪念を取り払う。ひとまず素数でも数えて落ち着こう。ものすごくベタではあるが。それよりもさ、

……素数ってなに？

「うん、よろしくねっ」

いつの間にか彼(?)は書き終えて俺の目の前にいた。

八幡「お、おう。よ、よろしくお願いします。戸塚さん」

そう言うときよりすごい笑顔が飛んできた。眼があ、眼があ——！！

彼(?)はテトテトと自分の席であろう机に戻って行った。

………なんの罨？

本日11月2日、晴天。

見事な遠足日和である。雨でも中止にならないこの遠足、超しんどい。今更雨が降られても困るんだけどさ。

バス酔いはないから俺は読書で移動時間、かつレクリエーション、かつうるさい時間を過ごす。

なんでこういうときにレクリエーションなんてやるの？簡単に考えてもみる。移動中に体力を使うんだぞ？これから遊べなくなるだろ？まあ俺は遊ばないんだけどさ。ほんと、遊びに対するリア充の体力の多さはわけわからん。人類の不思議の一つだ。俺は非常時に備えて体力を使わない。遊ぶのが面倒だとか、遊ぶ相手がいないだとか、そんなことは関係ない。関係、ないんだからね！

うるさく過ごすのもレクリエーションと同様の理由でわからん。てか、迷惑。もつと周りを見てみる。迷惑極まりないだろ。腐った眼を持つている人に言われたくないって？知ってるよ、そんなこと。

んで、まあ、俺も実はそわそわしている。別に遠足が楽しみだからじゃない。………いつもいない隣に人がいるというのはどうも落ち着かないからだ。

八幡「ねえ戸塚さん。なんで俺の隣を選んだんだ？他に人いるでしょ？」

戸塚「迷惑、だった………？」

だからそんな女の子みたいなかわいい動きとかしないでくださいお願いします。

八幡「迷惑じゃないけどさ。俺クラスで影薄いじゃないですか。そんなやつと隣って
いうのが、どうも………」

かなり遠回しな言い方だなーと思う。存在感がないとはつきり言わないあたりが。
自分を貶すの超得意。他人を貶すのも超得意。俺ってすごい。

戸塚「なんと、なく………だよ。比企谷君、優しそうだし、仲良くでき、そう、だつ
た………から………」

そわそわもじもじ彼(?)はする。というか、優しそうってなに?俺のどこに優しさがあるのだろうか。そもそも、この眼、腐った眼を持つてるやつが優しそうってのは世も末というやつか。

俺の優しい要素?俺が口を開かないから周りに迷惑をかけない優しさ。なにこの優しさ、めっちゃ重要。

八幡「そう、ですか」

戸塚「うんっ」

なんでそんなかわいいんだろう。これが女の子だったら速攻で告白してーーーーいやしないな。そもそも話しかけられるわけがないな。危ない危ない、変な仮定と妄想で頭が潰れるところだった。クールダウンだ、比企谷八幡。クールになれ……………。

別に女の子とか関係なく告白すればいいじゃないか。……………やばい。考えがぶっ飛び始めた。

八幡「はい、ゆっくり深呼吸してください。吸ってー、吐いてー」

別に妄想の世界で運動してるわけではないということとはあらかじめ言っておく。

俺は隣の彼(?)の背中をさすっている。

……戸塚さんが車に酔った。

吐きはしてないからこちらへの被害はないが、吐かないというのは当人にとってはきついものだろう。

八幡「吐けるんなら吐いた方がいいですよ」

こんなかわいい子の吐くところは見たくないな。言ってる気づいた。というか、吐いたら完全に俺悪者じゃん。クラスからの一斉放火がまつてる。一斉放課なら嬉しいんだけど。

戸塚「あ、ごめんね。もう、大丈夫、だよ」

八幡「ならよかつた」

という感じにバスの中を過ごした。というか戸塚さん吐く気配が一切なかつたし。ただの体調不良として考えた方が幾分合点がいく。大丈夫って言ってからいつものこう、なに？かわいい笑顔だつたし。外から入る陽射しが頬に当たる。

—————

遠足の目的地に着いて、さつそく訪れた自由時間、英語で言うフリータイム、こういうある程度限られた範囲だと班行動とかないから超便利。俺も遠足を堪能するとしてよう。

それなりにある自然、涼やかな風、鳥のわずかな鳴き声。実に心地がいい。本を読もう昼寝をしよう。え？わざわざここでやらなくてもいいって？こういう特別な環境で読書したり昼寝をするのがいんじゃないか。別に他にやることがないわけではないから勘違いしないように。

わりと危なかった。うっかり熟睡してバスに乗り込めないとこだった。

存在を認識されない人間（それを一般にぼっちと言う）にとつてはこういうときの危機管理が重要になってくる。まだ、「あれ？この席誰だっけ？そもそもいたっけ？」みたいな感じの扱いならいい。いたかもという話がおきるからな。

だけどな。そんな会話や扱いすらされない俺にとつては危険なんだ。おいてかれるのも問題だが、俺自身、おいていかれたことに気づかない可能性があるのだ。そしてそのまま閉園時間を通り越してしまうのだ。従業員も帰宅して完全に帰れなくなる。こうして一人、この世から消される存在が現れるのだ……。消されるのに現れるってなんだかおもしろい。ははは……。

戸塚「あ、比企谷君」

八幡「あ、どうも。戸塚さん」

そうか、俺の隣には人がいるのか。今までの経験上初である。隣に人ってなんか婚約

者みたいな言い方だな。ベベベ別にと、とと戸塚さんとうこうなんて思っ
てないし？

そしてなぜか戸塚さんは不機嫌な顔になっていた。あれれ？まさか心
読まれた？読心術の使い手なの？

戸塚「なんか比企谷君、僕との距離遠いよね？」

八幡「そ、そうですか？」

あれ？予想してた言葉がじゃなかった。

距離？まさか本当に隣でいいのか？このままずっと隣でいいのか？

戸塚「うん、なんなんだろうね。なんか、壁？みたいなものがある、とい
うか……」

八幡「気のせい、だと思いますが」

あいにくだが、俺はまだ戸塚さんという存在を認識できていない。彼(?)
の情報

完全に捉え、その上で俺との関係を作ったとしたときのメリットデメリット、黒字赤字の計算にパーセンテージをかける。おそらくその計算のための式を探すというのが壁と見えているのだろう。数学嫌なのにこういう計算大好き。

ていうか、壁？って言ったときの少し首を傾げて言ってくるもんで、やばいです
………

戸塚「そう、かな………？」

八幡「そう、ですよ」

そつかと戸塚さんは呟いて向きを改めた。

特に会話はないまま、景色は移り変わる。

それから学校に着くまでそこその量（俺からしたらかなりな量だが）の会話をした。

—————

本日11月6日、晴天。

遠足の熱は冷め、二年は修学旅行から帰ってきてしまった昨日。これで学校の人口密度も高くなってしまふ。

まあ、俺と俺の周りは常に空気だから学校の人口密度が高くなっても大して変わらな
いのだが。

という俺は今日も昼休みは見つけたベストプレイスで昼ごはんを食べる。

今日も今日とて昼休みに部活動さんは練習をする。ここからはテニスコートが見え、
ボールとラケットが弾くりズムはここまで綺麗に響いている。ほんと、よくやるよね。

今日の練習も終わりなのか、テニスコートにいた生徒たちはずらずら解散していく。
と、そのうちの一人がこちらに向かって歩いてくる。いな、少し足早だ。ちとちとこち
らに向かつてくる。なにそれかわいい……。てか、見覚えがある。

「比企谷君」

かわいい子が俺の名前を呼んでいる。手を振りながらこちらに向かつてくる。どん
だけ向かつてくるのを強調してんだよ俺。

ええと、あ。戸塚さんか。印象深いと名前を覚えてしまうもので、彼(?)は覚えた。というか、印象深くつても相手が名乗ってくれないから覚えられない事例が多々発生するから覚えてないんだが。

八幡「戸塚さん、どうも」

戸塚「うん！」

くっ……。なんなんだこの笑顔のダメージは。そんな純粹は目で、笑顔をこちらに向けないでくれ！

八幡「戸塚さんってテニス部だったんだ」

戸塚「そうだよ。ねえ比企谷君？」

八幡「なんですか？」

戸塚「こんど、どこかでテニス、しない？」

これはこれは、もしかするとデートというやつですかね。初めて誘われたぜ！ぷひっ。

八幡「いいですよ」

戸塚「やった！」

そんながつつり喜ぶほどなのか？というか、両肘を内に折ってグー作るとかかわいいにもほどがある。

戸塚「そ、それじゃあ。あ、ええと。け、携帯の番号、教えて？」

……。

八幡「はい」

渡す。

戸塚「ありがとう」

笑顔。

—————

はあ、まさか頭の中で言葉が一語ずつしか出せなくなるとは。あまりのショック（嬉しさ）の大きさが影響だろう。

というか、午後の授業集中できなかつた。戸塚さんとのイベントで浮かれてしまった。まあ数学と物理だからなんにせよ集中しなかつたけど。

さて、帰るか。

と、廊下を曲がろうとした俺の目線の先に人一人。これはあれだな。これから俺がどう頑張っても。ぶつかるな。

どん、と俺はぶつかる。女子と。

彼女は力がないのか、後ろ向きに倒れこむ。右手を彼女の首あたりに添えて彼女を支える。うわあ、これやってみたかったやつじゃん。

そして彼女は俺の顔を見るとやたらめったら驚いた表情を作り出した。

………いくら眼が腐ってるからってその反応はちよつと、ねえ？

八幡「あ、すみません」

ぶつかっただことに対しての謝罪であって、決して腐った眼で怖がらせたことに対してではない。

すると、彼女は首を横に振って左手は胸に、右手は左手首を握る。

少し赤みがかった黒い髪。この黒さは深いものではないが、とても綺麗だ。身長は俺よりも低い。まあ俺も高い方じゃないんだけど。ちなみにかわいい。そして、胸がでかい。これにさつきぶつかっただと思うと………、ケフンケフン。んんん。

待てよ。彼女どつかで見なかったか？なんか、見たことある感じがするんだが。気のせいかな、はたまた学校ですれ違ったか。そんなところか？

というより、彼女のそわそわってあれだわ。俺がいつまでも手を首に回してるからだ。確かに俺が女子だったらいケメンじゃないやつに抱かれても嬉しくないもん。早

く離そう。

ということ、離したら彼女は颯爽と走っていった。

……なんか言えよ。

あまりにもシヨツクだったのか？

はあとため息を吐くと、足元に生徒手帳が落ちている。彼女のものだろうか。まあ、拾っておくかとそれを拾い上げる。さてさて名前はつと。

そこには“由比ヶ浜結衣”という名前があった。

聞いたことある名前。か？なんか聞いた気がするが、どこで聞いたかまったくわからない。

てかなにこのラブコメディベントー……。普通こんなことあったら墮ちるよ？いいの？神様いいの？俺が墮ちちゃってもいいの？

というどうでもいいことを考えながら、由比ヶ浜という名前の出どころを思い出そうとする。

……。

うん、無理。あれれ？俺ってこんなに記憶力なかったっけ？もう年か？年なのか？いつの間に年をとってたんだけ？

あれ、なんでだろう。少し寒気がした。後ろの方からずずずと。振り向きたい気も

あるのだが、二度と帰れない気がしたからそのまま俺は下駄箱に向かう足を進める。ひとまず逃げたいです。何の冷気か知らないけど、いや知らないからこそ、怖いです。

今日は疲れた。主に冷気のせいで。俺は自分の部屋に明かりを灯し（最近つてすこいよね。スイッチ一つで明るくなるとか。俺はいつ時代の人だよ）、ベッドに倒れこむ。ベッドつてドよりもトつて感じに言ってる気がするのつて俺だけ？

八幡「由比ヶ浜、結衣」

彼女の生徒手帳を片手にそんなことを呟いた。

どこかで聞いたことあるんだよね……………。

というか、どっかで見たよね。ほんと、どこだっけ。